

[論文]

子どものコミュニケーション能力の 素地を育てる外国語活動

小学校におけるプロジェクト型外国語活動を中心に

佐藤 佳子

A Study of Project-Based English Teaching at Japanese Elementary Schools — Effective Methods for Developing Children's Communicative Abilities —

Keiko SATO

According to official Japanese government guidelines, children's overall communicative abilities may be enhanced through acquiring a second language at elementary level. Although appropriate methods and activities for English teaching at elementary level have been rationalized, schools still face difficulties in devising strategies for teaching young learners. In this context, I argue that project-based English teaching may be one effective strategy for developing children's communicative abilities. On the basis that second languages are acquired from language content and personal experience rather than grammar skills, the strategy of project-based teaching is discussed in the light of current circumstances in schools and children's cognitive development.

はじめに

世の中はグローバル化の時代になり、これからの時代を生きる子どもたちは国際的な視野での教育が必要になる。「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」^①によると、グローバル人材に求められている第一の要素として、「語学力」と「コミュニケーション能力」が挙げられている。異文化を受け入れ、グローバル化社会に対応できるよう、子どもたちにも語学力とコミュニケーション能力を育成することが求められているのである。小学校教育においても平成23（2011）年度より外国語活動が5、6年生の授業で必修となり、それぞれ週1回、年間35単位時間実施されている。小学校の段階から長期的な視野に立ち、生涯教育としての英語教育につなげようと意図する部分は大きい。

それでは「語学力」や「コミュニケーション能力」をつけるために小学校教育では何ができるのか。外国語活動で本当に必要としていることは何か、を見直していくことが迫られているなかで、外国語活動はますます変化を求められており、充実させていく必要がある。本稿では、これまでの外国語活動を踏まえ、今後の小学校における英語教育の在り方について考える。具体的には、小学校段階で育てるべき能力について探りながら、子どもたちの発達段階にふさわしい活動として注目されている内容重視の活動やプロジェクト型外国語活動について取り上げる。

1. 小学校外国語活動で何を教えるのか

文部科学省の学習指導要領によると、外国語活動のねらいは「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことであるという。小学校段階では「コミュニケーション能力の素地」を

育成することの重要性が強調されており、この育成には「コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが重要である」（解説7ページ）ことが指摘されている。小学校段階で求められている英語教育は、中学校の外国語科（英語）の目標や内容と比較することにより、より明確になる。中学校の学習指導要領の外国語によると、中学校の第1学年における言語活動の取り扱いについては、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること」とあることが述べられており、ここからもわかるように、小学校の外国語活動で期待されていることは、中学校英語の前倒しでもなく、また、英語のスキルを習得することが第一の目的でもない。あくまでも「体験的な理解」、「音声」、「コミュニケーションに対する積極的な態度」が中心であるということである。

では、誰が教えているのか。指導者については、英語の専門でないHRT（学級担任）が中心となって、ALT（外国語指導助手）、JTE（日本人英語教師）とともにチームティーチング（TT）を行うケースが多い。HRTは、英語の専門ではないものの、子どものことをよく理解しており、子どもと英語をつなげる役割を果たしてくれる。指導者はそれぞれの魅力的な役割を発揮するだけで十分である。小学校段階の子どもたちは、英語のスキル面の向上のみを身に付けるのではなく、「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする」（解説7ページ）ことを身に付けながら、達成感を味わったり、外国語活動への意欲を高めていくのである。子どもの特性を活かし、興味・関心を持続させていくには久埜（2008）が指摘するように、「子どもたちは考えられている以上に高い英語を聴き続ける力を潜在的にもっており、英語を使ってみようとする意欲も旺盛である」（192ページ）。子どもたちの潜在的な力を伸ばしてあげること、小学校だからこそできる英語教育を進め

ていくことが重要である。子どもの発達段階に合った体験的な活動を重視し、子どもの知的好奇心を満たす学びを構築していくことが教師に求められている。

2. 外国語活動の現状と課題

外国語活動では歌、チャンツ（英語の自然なイントネーションやストレスをこわさずに、音楽に乗せて英語を発話する活動や教材、指導法）⁽²⁾ やゲームを組み合わせながら、音声や基本的な表現に慣れ親しませる活動を積極的に行っている。英語が楽しいと感じられる体験的な学習を通して、子どもたちが主体的に活動できるよう工夫している。こうした工夫により、小学校では英語嫌いを生み出すことがないよう、英語で伝えることのよこびや楽しみが味わえる授業作りに取り組んでいる。しかし、子どもたちが楽しいと思える外国語活動は、必ずしも十分でなく、楽しさだけでは成り立たない部分が目立つ。外国語活動がめざすところから離れてしまい、学習の深まりが不十分になるケースもよくみられる。表面的な理解や単に楽しい活動に終わらせないことが今後の課題である。特に高学年では、低学年のように積極的に声に出したり、歌ったりするような活動への参加意欲が下がってくる。高学年では自己を意識するようになり、単純な活動では参加しなくなる。この大きな要因として考えられるのは、これまで行われてきた英語活動の内容にある。外国語活動が始まる前から小学校では英語活動が行われており、「総合的な学習の時間」のなかでも国際理解教育の一環として実施されてきた。その時から歌、チャンツやゲームなどの活動を行っているが、その活動は毎時間の活動内容が教師によって設定されている場合が多い。始まりのあいさつから毎回の活動内容、ゲームや歌、終わりのあいさつまでが決定されており、子どもたちが主体的に活動するカリキュラムが組まれるのではない。いわゆるプログラム型カリキュラムが続いていることも今後の課題である。東野・高島（2007）はプログラム型カリキュラムについて、中学校や高等学

校で使われているカリキュラムの形式であるととらえ、「あらかじめ授業内容がすべて定められ、児童はこれに従って学習していく形のカリキュラム」(6ページ)であると述べている。毎時間の活動内容は単発的である。このようなカリキュラムに関して東野・高島(2007)は、学習内容が積み重ねられず、学習が非効率的であることを次のように指摘する：「①次の授業時間との間隔が空き②内容的な繋がりも不十分となり、活動を通して学んだことが積み上がりにくいという問題が生じる。また、活動が1時間の授業のなかで細分化され、細部までもが教師によって決められていることで、③小学校教育で重要視される『主体的・創造的』な活動とはほど遠いものになる。このため、④児童の意欲や関心を高め、それらを持続させることは極めて困難となる」(7ページ)と分析している。これまでの英語活動の要素を取り入れたままでは、子どもたちの興味、関心を持続される活動は難しくなる。英語活動から続いているカリキュラムや内容については、今後転換していくことが求められるのではないかと考える。

子どもたちの学習意欲を高める授業にするためには、このようなパターン・プラクティス(表現習得のために繰り返し行う口頭練習)⁽³⁾とならないよう心がけ、子どもたちが主体的に行動し、他者とコミュニケーションをとりながら、その過程で英語が入るよう場面を設けることが大切である。久埜(2008)は英語のインプットについて、英語の単語や表現はそれぞれが使われる「場面」を設定することが必要であることを指摘し、「英語をインプットするには、子どもにとって問いかけられたり語りかけられたりする内容が必然性のあるものでなければならない。語り合うために真実味のある場面を作り出し、子どもの知っていると思われる単語を手がかりに、日本語で説明することなく確認していく」(198-199ページ)と述べている。小学校段階では子どもが「言いたい」という気持ちを大切に育てていくことが望ましく、そのためには単に英語の表現を繰り返す活動ではなくインフォメーション・ギャップ⁽⁴⁾を設けることが必要である。子どもは言いたいことがあるから活動に意欲的になるのである。

3. 小学校の外国語活動にふさわしい活動

高学年になると、論理的思考力が高まり、知的好奇心も旺盛になる。したがって、低学年で取り入れやすい歌やジェスチャー、単純なゲームでは満足がいかない。歌わない子ども、英語を発話するのに抵抗がある子どもが増えてくる。子どもの発達段階に合った活動を工夫することが教師に求められている。ここでは、外国語活動で教える内容との関連で、子どもたちが意欲的に取り組める活動を取り上げていく。まずは、子どもたちにふさわしい活動の在り方を考えるうえで、小学校の子どもたちに英語を教えるにあたって、小学校の段階だからこそ大切にしていかなければならない要素について取り上げる。①子どもたちがある程度知っている部分に英語を入れる工夫をし、子どもたちが身近に感じる題材を扱いながら、興味を持って使える部分を作る。②コミュニケーションができる場面設定。体験活動との連動で、動機付けと成功体験につながる活動を取り入れる。特に小学校段階では子どもに達成感を持たせることが大事であり、ことばの必要感と通じるよこびを体験できるよう場面を設定する。渋谷（2010）は「コミュニケーション能力の素地」とは「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」（16ページ）であると捉え、「コミュニケーションの内容・相手・手段に対する関心」、「相手の話す英語を聞いて、推測したり類推したりしながら理解しようとする意欲や態度」、「相手に何らかの反応を示そうとする意欲や態度」（17ページ）と説明する。渋谷（2010）が説くように、相手を思い、相手の話を聞いて理解することや、相手に自分の伝えたいことを伝えることの難しさを感じながら、わかりやすく伝えるための、さまざまコミュニケーション能力が育てられていくのである。そのためにもコミュニケーションを体験できる場面の設定が必要である。なによりも、単発的な活動よりも、一つひとつ積み上げるものがあると効果的であると考えられる。

(1) 内容重視の外国語活動

ことはが育つにはさまざまな側面があるといえる。学習者の発達に合わせた英語教育が行われているなか、小学校の段階では内容中心の英語学習がよいといわれている。内容をしっかり教えることで、中学校に入ってから文法的学習にも役立ってくる。英語をかたまりで覚えることは、中学校に入ってから小学校で聞いたり言ったりした表現はこういう意味だったのかということがわかればよい。東野・高島(2007)は、子どもの発達段階に考慮した「タスクを志向した活動」を考え、英語を用いて、課題解決的な学習が十分に行えるための条件を次のように挙げている：「①言語を用いて課題解決をする目標がある。②2人以上による情報の授受・交換を行う。③話し手と聞き手に情報(量)の差がある。④指定されたモデル・ダイアログなどに従って活動する」(12ページ)。

(2) プロジェクト型外国語活動

東野・高島(2007)は「タスクを志向した活動」としてプロジェクト型のカリキュラムを作成し授業を行うことを述べている。「プロジェクト型カリキュラム」とは、「ある特定の課題を解決するために、数時間をまとめ取りしてグループなどで児童の主体性・自主性を最大限尊重しながら、創造的な活動をさせるものである」(15ページ)という。単発的なプログラム型カリキュラムとは異なり、体系的な学びが可能となり、カリキュラムとして取り入れられる。東野(2011)が述べるように、子どもたちは課題を見つけ(または与えられ)、それに対してゴールを決定し、ゴールに向かって、他者や自分の考えを理解し、協力していく。この過程で、子どもたちはコミュニケーション能力の素地を養うことができる。ゴールに向かっての明確な意識が、子どもたちの興味・関心の持続にもつながってくるのである。東野・高島(2007)は「課題解決の課程で、児童たちは必要な活動を選択し決定していくため、必然的に主体的・創造的な学びが児童から生まれてくる」(9ページ)ことを強調する。実生活に寄り添

ったものになっていることが必要であるが、繰り返し行う要素が含まれており、そこに子どもたちの力がついてくる可能性は大いに期待できる。プロジェクト型カリキュラムにおける外国語活動は、東野（2011）によると、「それぞれの課題を解決していく段階で、英語を使わざるを得ない内容を組み込むこと」（19-20ページ）で成り立つ。「授業内容は、教師が、最初から一方的に活動内容を決定したり、与えたりするのではなく」（20ページ）、教師が支援しながら、子どもたちとの共同作業を通して、共に作り上げていく活動が中心となる。高学年にありがちな学習意欲の低下は、小中連携という観点からも、中学校以降の学習に効果的につなげることができない。そのためにも、プロジェクト型外国語活動は今後の外国語活動に有効であり、実践していきたい。

4. まとめにかえて

小学校外国語活動が目標としているところは「コミュニケーション能力の素地」を育成することであるが、小学校段階の子どもたちの発達に合った活動を充実させていくことが今後の大きな課題である。小学校だからこそ可能である英語教育の在り方を考えるうえで欠かせない要素は、まずは、子どもたちが生き生きと楽しく活動に取り組めることである。そして、子どもたちが主体的に行動し、自ら課題をみつけ、解決していく場面を設定し、コミュニケーションを中心とした体験的な活動を通して「コミュニケーション能力の素地」を養っていくことである。それは教師主導のカリキュラムではなく、また、スキルから学ぶ英語学習でもない、内容重視の活動を取り入れたプロジェクト型外国語活動が今後の外国語活動を豊かにしてくれる大きな要素であるといえる。

(注)

- (1) 平成23（2011）年5月19日に「グローバル人材育成推進会議」が設置され、平成24（2012）年6月4日に「審議まとめ」が発表された。要素Ⅰ「語学力・コミュニケーション能力」の他に、要素Ⅱ「主体性・積極性」「チャレンジ精神」「協調性・柔軟性」「責任感・使命感」、要素Ⅲ「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」が挙げられ

- ている。
- (2) 岡秀夫・金森強編著『小学校外国語活動の進め方―「ことばの教育」として―』、成美堂、2012年、93、175ページ。
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、東洋館出版社、2008年、8ページ。
- (4) 「話者Aと話者Bの間に情報のギャップが生まれ、そのギャップを埋める必要が生じたときに、人はコミュニケーションを図ろうとする」。村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』、大修館書店、2006年、53ページ。
- 「コミュニケーション活動においては、名前や年齢など、すでに知っていることを聞き合うのではなく、インフォメーション・ギャップを作り、新しい情報のやりとりが起こる活動を考えることが大切」である。岡秀夫・金森強編著『小学校外国語活動の進め方―「ことばの教育」として―』、成美堂、2012年、247ページ。

(引用文献)

- 岡秀夫・金森強編著『小学校外国語活動の進め方―「ことばの教育」として―』、成美堂、2012年。
- 久楚百合「小学校英語 中学への英語学習基盤のために」、『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』、松柏社、2008年。
- グローバル人材育成推進会議『グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）』、2012年（<http://www.kantei.go.jp/singi/global/120611matome.pdf>）。
- 渋谷徹『ダメな英語活動、よい英語活動』、明治図書、2010年。
- 東野裕子・高島英幸共著『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』、高陵社書店、2007年。
- 東野裕子「小・中学校の9年間を視野に入れたプロジェクト型外国語活動」『英語教育』、第60巻・第9号、2011年11月号、19-22ページ。
- 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』、大修館書店、2006年。
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、東洋館出版社、2008年。
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』、東洋館出版社、2008年。